

学びの風便り

リーディングスクール通信 44 R7.6.15

発行：松本市教育委員会 教育研修センター



学びの改革のあゆみ 島立小学校・開明小学校



島立小学校 「自ら学び人との関わりの中で自己表現できる島立っ子」を願って

リーディングスクールアソシエイト校として、2年目の歩みをスタートした島立小学校。昨年度、先生方からの「自由進度学習にチャレンジしてみたい」という声をきっかけに発生した取組みを、今年度は全校研究としてさらに深め、広げていきます。

昨年度の取組みの共有

令和7年度の出発は、昨年度の取組みを共有するところから始まりました。昨年度は自由進度学習の経験を持つ先生に授業を公開してもらい、自由進度について語り合ったり、東京都の実践校へ視察に出かけ、写真や資料を職員研修で共有したりすることで、単元内自由進度学習への機運が高まりました。また、一日学校を休みにして、授業づくり研修を行うなど、学校全体でダイナミックな授業づくりのチャレンジをしていきました。

その中で湧き上がってきた不安や疑問も、率直に意見交換を行ってきました。年度末に「単元内自由進度学習をやってみて思ったこと」をテーマに意見交換を行うと、「教材作りが難しい」、「評価はどうすればいいの」、「先生一人では大変」など、実践への難しさが語られる一方で、「できる子は難しい問題にどんどんチャレンジできる」、「準備、大変だけど楽しいよ」など、自由進度学習に希望や楽しさを見出す先生方の声が上がりました。二年目の歩みへ向けて、先生方のイメージを共有し、自由進度学習への思いを強くした時間となりました。



4月、さあ「自由進度学習」をはじめよう！

4月25日の職員研修では、小グループに分かれ、単元内自由進度学習を行う単元について協議しました。

高学年部会では、「つけたい力が何なのか、明確にしてから授業を作り始めないといけないね」、「体験的な学習場面があった方が、子ども達の意欲も向上するのでは」といった意見が出されました。また、自由進度学習に限らず、授業の中でどのように「子どもに学習の主導権を委ねる場面」を設けているのかについても話が及び、互



いの実践について熱心に語り合う先生方の姿が印象的でした。

低・中学年部会では、算数「わり算のひっ算」について自由進度学習で行えそうか検討する中で、「自由進度学習に適した単元と、そうでない単元があるのではないか」、「“一斉”と“委ねる”をハイブリッドでやっていくのもいいのでは」といった声が聞かれました。自由進度学習を行う上での率直な不安や疑問点についても語り合われ、真剣な声にこれからの授業づくりに向けた熱を感じました。

困り感を共有しながら、チームで取り組む自由進度学習の授業づくり

島立小学校では「えんjoy タイム」という名の、職員同士の対話の時間を不定期に設けています。「えん」は子どもと先生、先生同士など様々な「縁」を表しており、子どもの頑張っている姿や自分自身の教育観などを語り合い、お互いの理解を深めたり、他の先生から学びとったりすることを大切にしています。教師同士が対話を重ね関わり合っていく姿は、子ども達にも好影響を与えていくことでしょう。相互理解を深め、協働的に授業づくりを進めていこうとする島立小学校の先生方です。



開明小学校

「学びを楽しむ子ども・先生」をめざして

「いってみよう、きいてみよう、やってみよう」を合言葉として子どもたちと共有し、「みんなが幸せな学校」「『学び』を楽しむ子ども」を目指してきた開明小学校では、先生たちそれぞれが決めた「やりたいこと＝自己課題」の探究を軸に、校内研究が進められてきました。

開明小の研究で大切にしているのは「先生たちも、子どもたち同様、『楽しく』学ぶ」ことです。今年も「**学びを楽しむ子ども・先生**」をテーマに「学んで楽しくなくっちゃ！〇〇してよかったと思えるたい焼きタイム（重点研究会）をみんなでつくっていきましょう！」と研究がスタートし、先生たちは様々に対話を重ねながら、それぞれの自己課題を固めていきました。

「楽しさ」を問い直す

研究主任の横澤先生は、今年度の自己課題を練り上げる中で、先生たちの中に次のような「問い」が浮かびあがってきたと話されます。

「子どもたちは楽しそうに学んでいる。しかし、本当に『力』がついているのだろうか」

「私たちは一生懸命に授業を作っているが、どこに向かって『一生懸命』になるべきか」

このような先生たちの問いから、「子どもたち、先生たちの『やりたい』『楽しい』と『確かな力』を近づけること」を新たに目指す課題として共有しました。そして、研究推進部の先生たちと相談しながら次のような「**楽しい指導案検討研修**」を企画・実施しました。

AI が作成した指導案にダメ出し！

研修担当の先生は、国語の教科書教材を題材に AI が作成した「課題のある指導案」を示し、先生たちに「この指導案は何が課題ですか？」と問いかけました。AI が作ったものですから、遠慮はありません。先生たちは『どの自動車が好き？』（じどう車くらべ）という問いでは、この教材で『つける力』につながらないよね…」等々、AI 指導案の課題をどんどん指摘していきました。



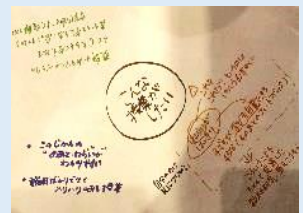
「いい授業」にするには？



次に問いかけられたのは「これをどう直せば『いい授業』になる？」。ここで先生たちの真剣さが加速します。「この教材で何を学ぶのか」「どう問いかけるのか」「子どもたちがどのようになるのか」等について、指導書を参考にしながら話し合い、模造紙指導案にたくさんの「修正点」を書き込んでいきました。書き込みは「主眼」「授業の構造」「単元で大切にしたいこと」等、多岐にわたりました。

「こんな授業がしたい」

研修の最後に「こんな授業がしたい」という題でリフレクション・セッション。共有シートには「めあて、ねらいがわかりやすい授業」「ねらいがはっきり、子どもが学びを自覚できる 45 分」など、先生たちが研修を通して見出した「新たな問い」が並びました。



「楽しさ」を更新する先生たち

研修会は大盛り上がりで「こんな楽しい『指導案検討』は初めて！」という声が先生たちから寄せられたといいます。百瀬校長先生はこの研修を振り返り次のように話されます。

AI 指導案を検討する過程で「自分もやっているかも…」という先生のつぶやきもありました。これまで、子どもたちの「楽しむ姿」を目指してきましたが、「場の楽しさ」から「学びの楽しさ」に「楽しさ」をシンカさせなければ、という先生たちの気づきが高まったのを感じます。職員室では、これまでも先生たちの授業や子ども、教材の話が盛んでしたが、子どもと一緒に「教材研究」をしようとする先生の姿も生まれてきました…

これまで個々の課題を協働的に「楽しく」探究してきた開明小の先生方。「子どもの『学びの楽しさ』」を問い直す営みの中で、先生方自身が味わう「学びの楽しさ」も更新していきます。